

## 「ドナーって言葉知ってる？」

臓器移植の現状 児童らに

いのちの学習会

子供たちに臓器移植への理解を深めてもらう特別授業「いのちの学習会」が、各学校で開かれている。いばらき腎臓財団（つくば市）が、2008年から小中学校などに医療関係の仕事に携わる人を派遣して、移植医療の現状を伝えている。「ドナーって言葉を知ってるかな」。11月27日、つくば市立今鹿島小学校の3年生のクラスで、つくば国際大学看護学科助教の山縣香織さんが児童に質問を投げかけた。

この日の授業では、最初にDVDを視聴。将来、医者を目指す主人公の男児が、病気で心臓移植を行うことになった同級生の女兒を見守りながら、臓器移植の仕事組みなどについて学ぶ内容だ。見終わった後、児童らは感想を語り、「命とは何か」について考えを話し合った。

このほか、山縣さんは用意した生後間もない赤ちゃんの実物大の人形を児童一人ひとりに抱っこさせた。人形と自分を比較することで成長を感じ、生きていることについて考えてもらうのが狙いだ。「みんなも生まれたときはこれくらいの大きさだった」と声をかけると、児童は驚きの声を上げた。

同財団は1989年に腎臓の働きが悪化し、心筋梗塞などの原因にもなる「慢性腎臓病」について知ってもらおうと設立。学習会は命の大切さや移植医療の現状、臓器移植を広く周知するために始めた。学校からの要請に応じて実施しており、現在は年間約20回行っている。

講師として、移植を経験した患者やその家族が実情を話すときもあるという。同財団の教育担当マネジャー福田佳奈子さんは「移植の話を通じて、病氣と闘っている人がいることや移植される臓器は誰かの死をもつて提供されるということを知ること、思いやりや優しさを養う機会になれば」と話している。